

2. 長井長義と徳島

依岡隆児

1 はじめに

長井長義 (1845-1929) は藩医の子として徳島で生まれている。長崎に「留学」してから、明治6年(1873)ベルリンに留学した。ホフマンに師事し、明治14年(1881)にベルリン大の助手になる。ドイツに十三年間滞在し、ドイツ人と結婚もしている。帰国後、明治17年(1884)に東京帝国大学薬学科教授となり、エフェドリンの構造決定と合成に成功する。日本薬学会会頭を務め、日本に薬学と有機化学を根づかせ、そのかわり、明治44年(1911)に日独協会を創設して、その理事長を務めた。現在、東京青山には日本薬学会の長井記念館がある。また、平成12年(2000)にはベルリンで「長井長義展」が開かれ、その功績はドイツでも回顧されている(ベルリン日独センター他「日独いしずえの歴史—長井長義展」)。

教育の面では、ドイツの大学制度を理想とし、精神科学と自然科学の統合を図ることを説いた。これからの日本には、知恵を搾り出す努力を望むとし、科学技術は人間の生き方や生活態度に裏打ちされているべきだとする。日本女子大学創設に尽力、校長も務めた。ドイツ人の妻テレーゼも雙葉学園でドイツ語と家政科を教え、夫婦で日本の女子教育に貢献した。

徳島との関連では、明治32年(1899)に徳島に里帰りし、徳島のために、藍の抽出過程を改良している。また、大正14年(1925)の徳島高等工業学校(徳島大理工学部)創設時に応用化学科製薬化学部(同薬学部)設置に尽力した。昭和2~3年(1927-28)の滞独中、年末を迎え、「日本のお正月が恋しうありました。おかちゃん(祖母さんの)を喰べそこないました」と篠塚きよし、小笠原孝子、村木啓子宛の書簡に書くなど¹、故郷のことを異国で懐かしむという側面もあった。さらに、孫の貞義によると、長井は終生徳島を愛し、徳島弁が抜けず、徳島の話をするのを好んだという。長義の遺志を継いだ息子や孫も徳島への思いを忘れず、徳島大学の長井記念ホール建設のために寄付している。

このように、国際的知名度のあった長井長義は徳島に対して深い愛着を抱き、故郷に貢献もしてきたのである。ところが地元の徳島ではこの長井のことがあまり知られていない。徳島大学の学生も薬学部の学生を除き、長井長義の名を知る者は少ない。徳島県における顕彰活動も、関連の学会や大学中心では時折行われているが、むしろ東京やベルリンなどでその名が聞かれることが多い。本稿が長井の徳島との関係を探るのは、こうした地元での長井の知名度の低さに対して、顕彰の一助ともなればという思いからである。

以下、本稿ではこうした思いから、長井の徳島の事物への思いや人との交流、没後の顕

¹ 金尾清造『長井長義伝』日本薬学会、1960年、396頁

彰活動について、関連資料や新聞記事などをもとに考察する。

2 徳島における長井長義〜一族、生家、帰国後の帰郷、大楠について

本章ではまず、長井の一族や生家のことと、ベルリン留学後の徳島への帰郷について、まとめてみる。

生家・一族

徳島名鑑編集会編『徳島名鑑』²によると、長井長義とその一族は以下の通りである。

長井長義

従三位勲二等、理学博士薬学博士、東京帝国大学医科大学教授、日本薬局方調査会長、私立独逸学協会中学校長、東京府士族

徳島藩士長井琳章の長男にして弘化2年6月20日生。

妻 シューマツヘル 西暦1862、10生（文久3年生）独逸人テレーゼマリヤマンデ、シニー、マツヘル長女

男 亜歴山 明20、1生、法学士

婦 多計代 明24、5生、長男亜歴山妻、男爵目加田種太郎五女、御茶水高等女学校出身

男 維理 明25、5生

女 エルザ 明21、4生

弟 平吉 安政2、12生

弟妻 まさ 文久2、5生、弟平吉妻、東京士、亡富田七十郎二女



図 現在では、生家跡のプレートと記念の石柱、生家のあった通りは「長井長義通り」と名づけられている（徳島市中常三島町2丁目、徳島大学工学部東側）。

さらに、ここに一族として紹介されていないが、長義の異母弟に長井新吉がいる。彼は長義と同様ドイツに留学し、ハレ大学で博士号を取得している。日本初の農学博士だった

² 徳島名鑑編集会編『徳島名鑑』、1922年

とされる³。

次に、長井がベルリンから帰国して後、徳島に帰郷したときをみてる。金尾『長井長義伝』の巻末年表によると、明治33年（1900）に6月13日に徳島県に出張、翌34年6月6日にも徳島県出張、大正11年（1923）4月14日に徳島市千秋閣に於ける日本薬学会総会に出席、大正14年（1925）10月に徳島高等工業学校開校式に臨席、昭和2年（1927）4月に徳島に墓参となっている。ただ、明治17年（1884）における帰国後の徳島訪問と、昭和2～3年（1927-28）のドイツ訪問後、昭和3年（1927）5月に帰郷したことについては、この年表には出ていない。

そのうち明治34年（1901）の来県に際しては、阿波藍製造販売組合の招聘で講話会を連続で開いている。「長井は阿波藍の衰微を痛嘆し、阿波藍から酵素の作用によって藍分を抽出する製造法を完成し、明治22年10月11日、第3767号をもって専売特許を獲得した。明治33～34年にわたり阿波藍製造販売組合の招聘に応じて数回帰県し、阿波藍の新製造法伝習所の学徒に講習・講義を行った」⁴という。

長井長義「阿波藍改良談」⁵は、阿波藍製造販売組合の招聘で長井が徳島市の田宮にあった阿波藍の新製造伝習所の生徒を対象に、明治34年（1901）7～8月に計6回開催されたものである。

第一回、明治34年（1901）7月29日午前の講話の演題「改良と学理の必要」では、最初に古きを尊ぶ風習にとらわれすぎず、新規のことに挑戦する気風が重要であると述べている。「明治では支那を模範国として亜流を此国に汲あり。（中略）新規なる事柄に就ては多く考究を為さざりき。是れ支那は古きを尊ぶの風習ありたればなり。故に偶々新規の事物を認むる事ありとするも之は古来嘗て有りたりものなりとし、先づ古書を搜索すると云ふが如し風習なりし」⁶

さらに、「夫れ斯くの如く万物全く旧慣のみに渡るの結果、研究心に疎ければ何事も上達する事能はざりし。日本の明治維新前の風習夫れ如斯なりしが故に、今日世界の文明国と伍を為すに至しは幸と云ふべきなり。さりとして予は単に古きを貴ばざるにあらず。此古き経験に加ふるに新しき研究を以てせんと欲するものにて（後略）」⁷

と述べ、我が国が従来、中国にならい、古いものを尊ぶという風習があり、学問においても、まず古書を渉獵するというのが一般的だったが、すべてがこの調子で研究心が発揮されないのでは、今日の文明国と競争する時代にはふさわしくないとしている。新しい時代においてこれからは古さを尊ぶだけではなく、新しいものに積極的に向かっていくことが大切だと生徒たちに説いているのである。

「植物と肥料の関係」という演題では、藍の生育と肥料について述べている。

³ 久馬一剛「農学分野日本初の博士は長井新吉か」『近創史』No.11, 2011年

⁴ 富田製薬株式会社社史編纂室『富田製薬百年のあゆみ』、1992年、87頁

⁵ 三木与吉郎編『阿波蘭譜 精藍講演』三木産業株式会社、1971年

⁶ 同書、177-178頁

⁷ 同書、178頁

「藍が始めは最も少なる種粒より発生し、遂に成長するにしたがって一反歩何百貫と云へる収穫あるに至るは如何なる原因に依るか」

ということに対して、これの「顕著なる例を求めば、彼の出来島堤上に在る大楠を見よ。之亦素は小粒なる種子より発生し、数百年の今日斯くの如き大木となりしなり」⁸とし、さらに、

「彼の出来島の大楠も素は一粒の種子より生じ、而も肥料を施与せしを聞かざるに今日の如く巨大なる者となりしは、不知不識の間に於て多くは土地より肥料成分を吸収して今日を見るに至りしならん」⁹

と述べている。ここでは、田宮伝習所にいる阿波藍研究会の会員である、地元の若者に対して当地の文物を引き合いに出して、植物の成長ついてわかりやすく解説しようとしているのである。

その一方で、細胞のことを、ドイツ語の「ツエルレ (zelle)」として、「小さき口のなき袋」、すなわち細胞 (Zelle) のことだと、ドイツ語を専門用語で使ったりもしている。

第二回、7月30日午前の講話では「植物の構造」という演題で、植物一般の構成について、わかりやすく説明している。

「草木には成長に必要な滋養成分を入れる所の口なきが如し。斯く言えば彼の出来島の楠の如きもの、口なくして斯く大木となりしは如何と諸君は大に疑ひなき能はざるべし」¹⁰として、「草木の緑を帯びる部に一種奇妙なる口即ち孔があるなり」と解説している。

注目すべきことは、第一回の講話と同様に、ここでも「出来島の楠」を引き合いに出していることである。この楠は、徳島市の中央に位置する出来島にあった大楠のことで、当時、徳島では誰しもが知るランドマークであったようだ。ここからはまた、長井の故郷への愛着が藍や楠といった植物と密接に関連していることも推測できる。幼年時代にお城からの行きかえり、父・琳章から道々、薬草を教えてもらい、本草学の手ほどきを受けたという故郷での原体験がしのばれる。

この大楠は、残念ながら、第二次世界大戦の空襲で焼けた。現在はこの楠の元にあった祠が新町水際公園に移設され、往時をしのぶよすがとされている。

講話は以降、

第三回 7月31日午前の講話：「植物と元素及其作用」「物質的変化（水素と酸素）」「物質的変化（金属元素）」「物質的変化（硫黄）」「有機性肥料と無機性肥料」「肥料の応用及選択」

第四回 8月1日午前の講話：「物質的変化（窒素と磷と珪素）」「物質的変化（炭素）」

第五回 8月2日午前の講話：「藍の種類及採取方法」「新製法の発明と先輩の学説」「新製法と酸化の理由」「変則法」

第六回 8月2日午後の講話：「染料藍の種類及藍色テール色素」「発酵建と其使用」「便益

⁸ 同書、180頁

⁹ 同書、180頁

¹⁰ 同書、183頁

なる要点」「結論」

と続き、計 14 時間にわたった。長井は総括として、「藍業に関する一切の大要を略述し得たり。藍農・藍製造業に必要な化学的变化を語りしに過ぎざれば（後略）」¹¹と述べている。長井のこの講話は一般向けにわかりやすく植物の仕組から丁寧に解説しているもので、彼の教育者としての啓蒙者としての一面を垣間見ることができる。その背景には、「阿波藍の競争相手たる人工藍」という演題もあるように、徳島名産の藍が外国の人工藍の広まりで危機に陥りつつあるという現状認識があった。そのため、旧弊を脱して、文明国と伍するために日本人に、そして特に徳島の若者に、科学の分野での奮起を促すという意気込みを示しているのである。

新聞での報道では、徳島新報、明治 33 年（1900）7 月 29 日に、

「阿波藍製造販売組合の招聘で第 1 回講習会 7 月 27 日から 4 日間、第 2 回を 7 月 29 日から 『雑報 長井博士の講話二』 東洋では古いものを尊び、新しい物はすべて悪いという観念が離れない」

との講話の記録が掲載されている。

また、徳島名鑑編集会編『徳島名鑑』には、長井の文「食品問題に関し農家の覚醒を促す 薬品問題は小問題のみ」が掲載されている。

「国家衛生、薬品独立と云ふ点よりして是非とも内地に於て製造せなくてはならん」¹²ということに対して、薬品製造なら日本は今日すでに立派に製造しうる域になった。今更慌てることはない。薬品原材料をすべて国産にする必要もないと、述べていて、薬品の完全国産にこだわらなくてもよいとしている。長井の国際感覚がうかがえる。そのうえで、製薬分野にとどまらず、より広い視野で食品問題や農業問題について論じていく。

「要するに薬品問題は国家全体の上より観察すれば極めて小問題である。我国の農家には更に一層重き問題がある。いうまでもなく食料問題である」として、北海道、東北まで米作する必要はないと主張している¹³。米をくわずとも生命維持に困難はないとし、牧畜を奨励している¹⁴。当時としては、相当大胆な提言である。

長井はまた勤勉こそ成功と幸福の元であると主張する。ドイツのことわざに「何人も自己の幸福の鍛冶」ということがあるが、「人各々自分の幸福を作るという意」だとし¹⁵、さらにドイツの有名な製鉄工場主クルップ氏は「働くことは祈祷である」と言っていると¹⁶、ドイツのことわざや人物を引き合いに出しながら、勤勉を説いている。

また、自分の生涯を振り返り、「私は少い時分から今日に至るまで、幸ひに一生懸命働いて来ました」として、「働けば必ず報いがあると私は信じて居ります」¹⁷との人生哲学を披

¹¹ 同書、233 頁

¹² 『徳島名鑑』、前掲書、17 頁

¹³ 同書、340 頁

¹⁴ 同書、340-341 頁

¹⁵ 同書、342 頁

¹⁶ 同書、343 頁

¹⁷ 同書、343-344 頁

露している。このように、長井の人生観は、ヨーロッパ近代の勤勉主義と日本的道徳観が融合していたことがわかる。

徳島のことでは、長崎留学に際して、殿様からお金を出されて留学する際、父が用心のためとって 50 両をくれたと述べて、特に父への感謝の念を示している¹⁸。

最後に、「私は過ぎ去った昔を振り返って見て、何が一番不愉快であったかと考えても、思い出すほどの苦しいことはないのであります」と締めくくっている¹⁹。

以上、本章では長井の出自と一族のことや講演活動などを中心にみてきたが、このように、その節々から長井の徳島への思いの強さがうかがえよう。

3 長井長義ゆかりの人・もの～富田久三郎、徳島高等工業学校

長井と徳島との関係についてみてきたが、本章では、長井ゆかりの徳島の人やものを取りあげる。晩年に交流のあった富田久三郎と、自身も創設に関わった徳島高等工業学校（現・徳島大学）である。

富田久三郎との交流

鳴門の富田製薬創業者の富田久三郎は、静岡出身で、鳴門の塩田地帯で製薬会社を起業した声望家だった。俳人十湖との交遊もあった。十湖は本名・松島吉平（郡長）で、静岡県引佐鹿玉郡の出である。静岡浜松では俳聖とされ、門人が 13 人いた。大正 8 年（1919）に四国に足をのぼした。この十湖の銅像建立に、久三郎は寄付している²⁰。故郷への愛着と文人としての交流を大切にす人柄がしのばれる。

その久三郎と長井博士との交流が始まったのは、久三郎が県薬業同業組合の評議員ならびに代議員に選出されたとき（大正 9 年（1920））である。組合が大正 10 年（1921）7 月 26 日に長井日本薬学会会頭を招き、千秋閣で講演会を開いた。700 名の来場者で大盛況だった。その際に、久三郎と長井は出会っている。

『富田製薬百年のあゆみ』によると、同組合は大正 11 年（1922）4 月、国立徳島高等工業学校（徳島大学の前身）設置決定に臨み、製薬化学部の設置を要望、県民挙げての運動を活発に展開した結果、我が国最初の工業系統による製薬化学部が設置せられ、卒業生に薬剤師資格を与えられることになった²¹。むろん、この製薬化学部設置には長井も尽力していたのである。

また同年 6 月 18 日に組合総会が開かれ、翌年 4 月に徳島市で日本薬学大会ならびに四国四県連合化学工業品共進会の開催を決議した。

大正 12 年（1923）4 月 14 日、徳島市で日本薬学大会が開催される、県が全面支援、県議会の議決を経て総会費 5～6000 円を支出している。長井も出席している。薬学総会は県立

¹⁸ 同書、345 頁

¹⁹ 同書、345-346 頁

²⁰ 富田製薬株式会社社史編纂室、前掲書、24-25 頁

²¹ 同書、85-86 頁

徳島高等女学校を主会場に、2日目の15日に長井が司会で開かれている。

この総会には久三郎も出席したが、長井から訪独する際の同行を勧誘され、即時快諾したという²²。

ドイツへ

昭和2年(1927)、長井は富田久三郎を伴ってドイツに旅立つ。5月12日、長井長義、重歴山夫人多計代、令孫百合子、嶺子、貞義、正義、輝子、松井紀つ、羽島、大日本製薬専務取締役瀧野勇、西野敏太郎、富田久三郎の12名で渡欧した。ちなみに、大日本製薬は長井が創設にかかわった製薬会社である。6月21日にはベルリンで長男・重歴山の出迎えを受ける。重歴山は商務書記官としてベルリンに家族とともに赴任していた。博士の女性門下生で留学中の上野周が通訳を務めている²³。

久三郎はベルリンで化学会・薬学会合同の歓迎会に出席し、長井の講演を聞く。ジーマン電気会社、カイザー・ヴィルヘルム研究所を見学している。ライン地方の薬品染料製造会社であるバイエル製薬株式会社訪問するなど、83歳の長井と76歳の久三郎は各地を精力的に回った²⁴。長井はシュトレゼマン外相とヒンデンブルク大統領にも謁見している。

ドイツを見学して回った久三郎は、日本はドイツより50年遅れていると痛感する²⁵。お手伝いさんにいたるまで国税を負担している。ホテルの電灯は常夜灯ではなく、昇降の時のみ各自がスイッチを入れると一定の時間点灯し、自動的に消燈するようになっていると²⁶、先進国ドイツの社会システムや技術力に驚嘆している。

またこの旅行の際、板東俘虜収容所の俘虜だったクラウスニツァーに再会している。収容所があった当時、久三郎は富田畜産部を作り、畜産の技術を学ばせるために、このクラウスニツァーらを雇っていたのである。久三郎はこの旅行中に、騎士農場で上級酪農担当者となっていたクラウスニツァーをザクセン州タンネベルクに、通訳の上野周と二人で訪れたという²⁷。

久三郎は滞在8か月で、長井より一足早くドイツから帰国した。地元の鳴門では熱狂的歓迎を受ける²⁸。徳島毎日新聞では

昭和2年(1927)12月15日 「富田久三郎翁帰る」「12月18日に帰朝祝賀会(鳳鳴閣)」

昭和2年12月17日 「富田久三郎翁の出迎」「海岸一面に一山を築いた」

とあり、久三郎が鳴門で熱烈な出迎えを受けたことがわかる。

²² 同書、86頁

²³ 同書、115頁

²⁴ 同書、115頁

²⁵ 同書、118頁

²⁶ 同書、118頁

²⁷ 富田実「富田久三郎翁とドイツ兵俘虜—板東収容所時代の純ドイツ式牧舎について—」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』第9号、2011年、28頁。参考：松尾展成「日本語文献から見た『ドイツ牧舎』(徳島板東)指導者クラウスニツァー」『岡山大学経済学雑誌』34(3)、2002年。船本宇太郎・松本清一『ドイツ俘虜の家畜管理と酪農の草分け時代』三愛酪農部、1968年

²⁸ 同書、119頁

一方、欧州視察から帰った長井は昭和3年（1928）5月に帰県している。富田家に宿泊する。久三郎が同行し、徳島高等工業学校も訪問している²⁹。

ただ、長井はこのドイツ訪問の前にも欧米旅行をしていた。新聞報道によると、徳島日日新報には、大正10年（1921）9月23日に「辞職して長井博士 夫人同伴で米国の令嬢を訪れ其れから久々で独逸へ行く」とある。ここで「令嬢」というのは、エルザのことである。彼女はアメリカ人の興行家と結婚していた。この時は、長井はこの娘をアメリカに訪問してからドイツに渡っていたのである。

徳島高等工業学校

徳島日日新報の大正14年（1925）10月13日の記事には、徳島高等工業学校開校式で、薬業講演、長井長義「輓近化学の進歩」とある。

これは、大正14年10月16日 徳島高等工業学校開校記念式典に長井が来徳したときの記事である。千秋閣で祝賀会が開かれている。このときの「製薬講演会 3 博士」の一人が長井だった。長井は富田邸に宿泊している。

長井は徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部の設立時には、富松武助宛ての2月8日の書簡で薬学先進国のドイツに学ぶためにドイツ語知識が必要であると説いている³⁰。訪独中だった長井は、ベルリンから同校製薬化学部の学部長の篠田淳三宛てにも書簡を出している。ドイツの工場を視察したことに触れ、「薬工学技術養成の必要をますます感じました。実力の養成に重きを置き、教授方も実地を先にし、講義を後に」し、「教授と学生が協同して学び且つ研究する」ことを取り入れるべきだとしている³¹。こうした実験主義の「気質」は長井自身がドイツで研究者として身をもって習い憶えたものだった。

長井のドイツ訪問後の徳島帰郷については、徳島毎日新聞 昭和3年（1928）5月13日には、「長井博士一行来撫 富田製薬場を訪問」とあり、撫養の富田邸からその後、偕楽園の歓迎宴に向かったとの記事がある。

ドイツから帰国して、昭和3年（1928）5月に徳島に来たとき、長井は徳島工業高等学校に久三郎を連れて訪れている。同校中庭で、同校製薬化学部第4回卒業生と記念撮影した写真が残っている。そこには小溝茂橘校長³²、篠田淳三教授（初代製薬化学部長、後に第一製薬社長）も写っている。

4 その後～胸像と月桂樹、亜歴山ら子孫たち

ドイツから帰国後、昭和3年（1928）に徳島にやってきたその翌年に、長井は85歳で舌癌を患い、急性肺炎で亡くなった。墓地は神奈川県の腰越にある。戦後、長井の顕彰活動はどのようなものだったのだろうか。

²⁹ 同書、120頁

³⁰ 金尾、前掲書、353頁

³¹ 同書、353頁

³² 小溝初代校長の胸像は現在、徳島大学の理工学部の50周年記念公園（附属図書館横）に置かれている。

長井の胸像は日本薬学会によって徳島公園（城山公園）に建立された。銅像除幕式は昭和 29 年（1954）11 月 27 日で、息子の亜歴山が列席している。胸像は後に昭和 48 年（1973）、徳島大学薬学部開設 50 周年を記念して、同学部内に移転され、関連史料とともに展示された³³。

徳島新聞、昭和 29 年（1954）の記事「長井博士像序幕 “ロマンスの木”に守られて」にはこうある、

「博士のオイ徳島市一番町木内義郎さんの長女幸代ちゃん（八つ）が幕を除く。（中略）胸像の前に四株の月桂樹が植えられているが、この樹は故博士がドイツの化学者リービッヒの胸像除幕式に参列、その場で初めて知ったドイツ婦人テレゼ（のちの博士夫人）との結婚を祝して恩師のホフマン博士が博士に贈ったもの」

この木は、亜歴山がこのロマンの樹を東京の自宅に植えていたが、胸像建立を記念して、東京から送ったものだという。さらに息子の亜歴山氏の話として、「父は常に“どこよりも徳島がいい”といていた。祖父の琳章は蜂須賀藩お抱えの医者で、父はこの祖父からいろいろと薬草の話聞いた。父が多くの薬を創製したのも、この時代に祖父から受けた教育が身につけていたのだと思う。徳島のこの地に郷土の人々によって胸像が建てられこんなうれしいことはない」とのコメントを掲載している。

長井の一族である娘が銅像の幕を引いたというが、その父は正しくは「木内義朗」で、彼は長井の「オイ」ではなくて、妹孫である。彼はこの頃は徳島市一番町に住んでいたが、後に長井の生家に移り住む。月桂樹の由来についても疑義がある。この月桂樹はリービッヒ銅像除幕式の際（1883）に長井がテレゼと初めて会った記念というが、テレゼと会ったのはその後である。長井はリービッヒ銅像除幕式のため、ギーセンに旅行し、ホフマン先生からドイツ人女性との結婚を勧められ、その帰途にフランクフルトでテレゼと初めて出会っている。したがって、テレゼはこの除幕式には来ていなかったのである。「ホフマン博士」というのは「ホフマン博士」のことである。

亜歴山は、父が故郷のことをしのんでいたということを強調している。特に薬草の話をしてくれた父・琳章の記憶を大切にしていたことを明らかにしている。故郷での顕彰であることを割り引いても、やはり長井の植物に寄せる愛着の背景には故郷・徳島の記憶があったことがうかがえる。一方で、亜歴山自身も、長井のベルリン訪問に際しては、中尾万三によれば、ダーレムの植物園を案内するなど³⁴、植物好きだった。月桂樹を東京から移植したのは、彼の演出だっただろう。また後述するように、鳴門に別荘をかまえるなど、亜歴山自身、徳島に愛着があった。

銅像除幕式と月桂樹のことは、徳島新聞の昭和 49 年（1974）12 月 7 日に、江島知絵の「長井長義博士のこと」でも取り上げられている。江島は徳島短歌同人で、長井の胸像があった徳島公園に当時あった県立図書館に勤務していた。この記事によると、銅像除幕式は昭

³³ 徳島大学薬学部・薬科学教育部インフォメーションプラザ
https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/faculty/facilities/education_research/information_plaza.html

³⁴ 金尾、前掲書、376-378 頁

和 29 年（1954）11 月 27 日だった。長井の長男・重歴山が列席していた。彼は日独親善に尽力し、日独協会でドイツ語の講習会も開催していた人だった。その息子・貞義もその思いを継いでいる。昨年の秋、薬学部に長井の銅像が移された。前県商工課長で、日独協会事務局長だった吉田兵太郎は銅像建設の主唱者の一人だった。日独協会事務局は県立図書館にあった関係で筆者の江島と話す機会があったが、吉田から銅像の傍らの月桂樹が枯れてしまっているはずだという話をされたので、今から 10 数年まえに県南から来られたという未知の老人が長井の銅像の月桂樹が枯れているということを知り、それを聞いて小さな苗木を置いていったとのエピソードを、筆者はここで語る。それを育て、昨年の移転の時にも薬学部に運んだというのである。

これによると、銅像のところに植えていた月桂樹はその後、枯れてしまったが、見知らぬ老人がそれを聞いて、苗木をもってきてくれたという。このエピソードは、県や学会、協会主導の長井顕彰活動に対して、徳島の市民の行動という観点からその顕彰のあり方について考えさせられる。地元の市井の声や活動から、こうした顕彰が立ち上がらないと、それが根付くことはないのではないか。薬学部への移転は昭和 48 年（1975）のことである。この大学内への胸像移転についても、故郷での長井の顕彰という点では、一步後退したといえるかもしれない。実際、江島は「長井長義博士のこと」の記事の最後に、「薬学部生みの親の博士の胸像は、次代の薬学界をになう学生達の傍にあるべきであるとも思い、また、幾春秋を写生や遠足で、徳島公園を訪れる多くの小中学生に親しまれるのも、意義深いことではなかろうかと思うこの頃である」と記している。この記事を書いた筆者の胸像移転に対する真意をうかがうことができよう。

徳島大学との関連ではさらに、徳島大学薬学部の長井長義資料委員会が関連書籍を出版している。企画展として、「第 5 回特別展 徳島の偉人 長井長義展示会」（2013 年 4 月 22 日～8 月 30 日、於：徳島大学ガレリア新蔵展示室）を開催している³⁵。孫の貞義の寄付により、徳島大学に長井記念ホールが建設された。一方、長男の重歴山（アレキサンダー）は母テレゼを偲んで、ドイツから取り寄せた石材で鳴門大毛島土佐泊に洋館を建設した。現在は「花見山・心の手紙館」となっている³⁶。父譲りの花や植物好きと徳島への思いがそうさせたのであろう。

重歴山ら子どもたちについては、徳島県製薬協会『創立 25 周年記念 徳島県製薬史』昭和 50 年（1975）によると、

「重歴山は明治 20 年 1 月生まれ、東京帝国大学法科大学を卒業した法学士で、かつて外務省に勤務して永く外地に在任し、長女エルザは明治 22 年 4 月に生れ、北米合衆国のマーケティングバンネルに嫁したが、昭和 3 年の頃に未亡人となっており、次男維理は明治 25 年 5 月に生れ、東京帝国大学理科大学を卒業した理学士である」³⁷

³⁵ <https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/2013050200014/files/nagai.pdf> 2021 年 2 月 22 日アクセス

³⁶ 鳴門市大毛島の花見山「心の手紙館」ホームページ <https://www.hanami-yama.com/welcome/index.html> 2021 年 2 月 22 日アクセス

³⁷ 徳島県製薬協会『創立 25 周年記念 徳島県製薬史』、1975 年、29 頁

長井重歴山は、商務官としてベルリンに駐在していたが、1930年代、ベルリンの自宅を美術サロンにしていた。バウハウスの講師で日本の南画も学んだヨハネス・イッテンやドイツを訪れた竹久夢二との交流もあったという³⁸。

エルザについては、いくつか新聞記事がある。

朝日新聞、大正5年(1916)9月19日「チョコレートに包む愛の言葉—長井博士愛嬢の恋婿来る ▽30日に結婚式」(シカゴ市のディック・バンネル氏。数年前にシカゴ大学野球チームのマネージャーとして来日)

朝日新聞、大正8年(1919)4月28日「アメリカからお里帰り(長井博士の令嬢エルザさん)長井、エルザ、バンネル、維理、テレーゼが写った写真付き

朝日新聞、大正10年(1921)9月2日「総銀髪の長井博士引退 引退する長井博士—子等から贈物の新築の応接で」「エルザさん達が記念の為に新築して呉れたという米国流の洋館」

朝日新聞、大正11年(1922)5月8日「記念の家に残されたエルザさん 若い未亡人となって文化事業に」「バンネル氏は米国を旅行中流行性感冒で死去した」

地元の新聞には、こうした長井の子孫についての記事は、管見の限り、見つからない。

5 おわりに

以上、本稿は長井長義と徳島との関連を調べて、長井とその子孫たちの徳島への愛着を跡づけてみた。その一方で、現代におけるその功績と郷里への思いは、一部の関係者を除いて、あまり知られていないことに改めて気づかされた。全国的にも、またドイツにおいても、ときに顕彰がなされているのに、大学、学会・協会主導の顕彰活動がかえって地元の市井における受容を阻んでいる面もあるようにも感じた。本稿がそうした長井の顕彰のあり方に一石を投じることになるとすれば、幸いである。

だが、長井と徳島とのつながりは、そればかりではない。大正11年(1922)にアインシュタインが来日したが、これはそもそも彼を招聘した改造社が徳島ゆかりの賀川豊彦の『死線を越えて』が大ベストセラーとなったおかげで実現したものである。アインシュタインが日本に向かう船で、その航海の途上、急病に苦しむ彼を診察して助けたのは、やはり徳島出身の三宅速だった。さらに、来日中、アインシュタイン夫妻の通訳を務めたのが長井長義の妻テレーゼだったのだ。大正11年11月20日の小石川植物園で撮られた写真には、アインシュタインの横にテレーゼが黒い帽子に毛皮のコートを着て座っている。その椅子の後ろに立って、妻とアインシュタインをのぞき込んでいるのが、長井長義である。

³⁸ 金子宜正「ベルリンにおけるヨハネス・イッテンと日本人との交流」『デザイン学研究』Vol.50 No.6、2004年

ここにも、長井長義と徳島との不思議な縁がみられるだろう。長井長義を中心に、徳島を外からの視点で世界とつなげるには、まだまだ調査が必要であるようだ。

関連文献一覧

- 飯沼信子『長井長義とテレゼ：日本薬学の開祖』日本薬学会、2003年
- 桂廣太郎「長井長義先生と長井家の思い出」『Pharmaceutical Society of Japan』Vol.27, No.11, 1991年
- 金子宜正「ベルリンにおけるヨハネス・イッテンと日本人との交流」『デザイン学研究』Vol.50 No.6, 2004年
- 久馬一剛「農学分野日本初の博士は長井新吉か」『近創史』No.11, 2011年
- 渋谷雅之『阿波の偉人伝 長井長義』阿波銀行、2016年（第41回とくしま出版文化賞受賞）
- 徳島県製薬協会『創立25周年記念 徳島県製薬史』、1975年（1959年）
- 徳島大学薬学部長井長義映像評伝実行委員会制作『こころざし：舎密を愛した男：長井長義映像評伝』徳島大学薬学部長井長義映像評伝実行委員会、2011年
- 徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義博士関係資料一覧』徳島大学薬学部長井長義資料委員会、2005年
- 徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義ベルリン通信』徳島大学薬学部長井長義資料委員会、2005年
- 徳島大学薬学部長井長義資料委員会編『長井長義長崎日記、原本解説版』徳島大学薬友会出版部、2006年
- 徳島名鑑編集会編『徳島名鑑』、1922年
- 富田製薬株式会社社史編纂室『富田製薬百年のあゆみ』、1992年
- 富田実「富田久三郎翁とドイツ兵俘虜—板東収容所時代の純ドイツ式牧舎について—」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』第9号、2011年
- 長井長義、阿波藍同業組合編『長井長義氏講義録、私家版』、1901年
- の原博武『この人長井長義』CREATIVE BOOK 首都圏人 No.9、ヒューマン・クリエイティブ、2008年
- 「長井長義」パスファインダー、徳島大学附属図書館（依岡作成）
- https://opac.lib.tokushima-u.ac.jp/opac/home/result?q=長井長義&target=l&limedia_site_theme=limedia11&search=%E3%80%80検索%E3%80%80
- 船本宇太郎・松本清一『ドイツ俘虜の家畜管理と酪農の草分け時代』三愛酪農部、1968年
- ベルリン日独センター『日独いしずえの歴史—長井長義』、2000年
- ベルリン日独センター、日独協会『日独交流の架け橋を築いた人々』、2005年
- 松尾展成「日本語文献から見た『ドイツ牧舎』（徳島板東）指導者クラウドスニツァー」『岡山大学経済学雑誌』34（3）、2002年
- 三木与吉郎編『阿波蘭譜 精藍講演』三木産業株式会社刊、1971年